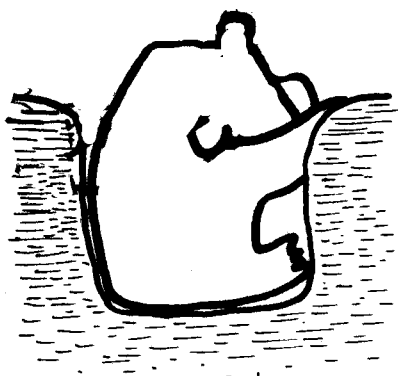


続ムツゴロウの

無人島記

畑 正憲

続ムツゴロウの
無人島記



畑 正憲

続ムツゴロウの無人島記

定価 四八〇円

昭和四十七年七月二日 印刷
昭和四十七年七月七日 発行

著者 畑 正憲

編集人 浜田 琉司

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島上

〒四五〇 名古屋市中村区堀内町

〒八〇二 北九州市小倉区紺屋町

印刷 東京ベル印刷 製本 大口製本

0095-507005-7904

続ムツゴロウの無人島記
目次

北海記 1 / 九

北海記 2 / 一五

愛護と撲滅 / 三

月に吠える / 一六

雪ユキ雪 / 一四

魔法の夜 / 四二

嶮暮帰綺談 / 四八

島と鳥 / 一四

殺す側の論理／六

デストロダイヤ／六

迎春日記／三

九郎物語―家出／九

九郎物語―失踪／六

ザク氷／三

九郎物語―再会／六

老母見参／二五

人力碎氷船／二三

嶮暮帰情報／二八

一年／三五

大中小ガン／二三

意外千万／四三

犬とヒグマ／五五

生物としての人間／二六

氷の夜／二六

ほやほやホヤ／二七三

貝の移住／二八〇

幽霊／二八六

島への手紙／二九三

牡丹雪／二九七

ノアの方舟／三〇五

大あとがき／三一

装幀・イラスト
著者

続ムツゴロウの無人島記

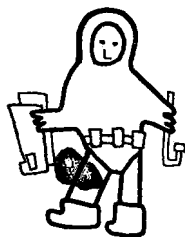
北海記 1

ついにやってきた。北の海が北の海である季節が。風と波と暗い雲が威張る時が。

海は日に日に重厚さを増し、微笑^{ほほえ}みを忘れてしまった。北風で雲が吹払われてしまっても、海は空の青をちょっぴり表面に浮かべるだけだ。生きるのに疲れた女の薄化粧に似て、指でめくると簡単にはげ落ちそうだ。

九月にはいって、チリ津波以来という大時化^{おおしけ}があった。風で海が岸に向かってふくれ、家のすぐ前まで波がきた。その日だけ私の小屋は海拔数十センチになり、海に面した窓ガラスに塩の花が咲いた。

すでに何日も前から、島には晩秋の気配が漂っている。裏の岸の草は茶色にしおたれ、ノコギリ草が花をつけたまま下を向いた。



浜をにぎわしたコンブ漁も終わりが近い。出漁の時間制限がなくなり、コンブ棒を下までおろしてさぐっても、三度に一度しか引つかかかってこないそうだ。

それでも漁師は沖へ出る。他の浜より豊かだといっても、ものいりも多い。最後の頑張り^{がんば}が生活必需品以外の夢に結びつくと思えば、少々の波をおして沖へ出る。

外洋のうねりは、一瞬たりとも安心出来ない。静かなようで、ひよんな時に大きな波がやってくる。そんな時、錨^{いかり}綱^{つな}を長く伸ばして舟がフリーになっていたらまだいい。が、採取に夢中になり、四、五本コンブをかかえこんでいると危険である。そこが支点になり、片側が持上げられてひっくり返る。

山を一つ越えた漁港の舟が転覆し、人が一人死んだ。

その数日後、琵琶瀬^{びわせ}の舟が三ばい沈んだ。しかし幸いにも、乗っていた人は全員救助された。コンブ取りは一年を三十日で暮らすいい商売だと聞いていたが、どうしてなかなかきびしいようだ。

私は顔なじみの漁師に訊いた。

「波の荒い場所で転覆して、よく大変な事故にならないのですね」

「そうだね」

六十の坂を二つ三つ越えたその漁師は、年輪が刻みこまれた顔を不敵にほころばせた。私はさらに訊いた。

「ここの人は、泳げない人が多いのでしよう。今年も、子供が泳いでいるのを見なかったもの」

「そうさね。水練が出来るのは、二十人に一人だけか」

「あとはカナヅチ」

「まんず、な」

「それでよく助かりますね。カナヅチが乗ってて船が転覆するのに」

「それは……」

と、彼はしばらく考えて答えた。

「人の命ちゅうもんは、そう簡単には折れんせいだべさ。それに漁師というものは、だれの舟がどこで何をしているか、見ないようで見ているんだわ。それで、事故があつたらすぐさま駆けつけるんで、ま、たいした事件にならずにすむんでねえべか」

人の命は簡単には折れない……というのは、私が苦勞して得た信念でもある。これについて述べるのと長くなるのですが、経験を積んで危難に耐える訓練をすると、何とか這い戻る粘りを獲得する。

また、無理を避けるようにもなる。大自然に立向かうには頼り得るものは自分のからだしかなく、そのからだの微妙な^{つふや}呟きに耳を貸すようになる。

そして、そこまで達するまで何度死にそうな目にあつたことか。それだけに、年老いた漁師の

言葉が身にしみた。

島に番屋を持つ漁師の中で、本格的な泳ぎを知っているのはカカアのWさんだけである。彼は東北育ちの豪快な男で、真冬、根にはさまった錨を上げるのに、えい面倒だとばかり合羽かっぱを着たままもぐったそうだ。それが自慢で、もう三度ばかりこう話してくれた。

「ここの漁師はだらしがなくてよ、おれがもぐっていったら呆あきれかえってるのだわア。だけど胴長はいけねえ、あのままとびこんだらよう、逆さになっちまっただべし」

それは、私も経験済みである。新しい環境で筆が進まず、締切りぎりぎりの夜に書きあげた原稿を発送しようと、夜、瀬を渡ろうとした時、水深を誤算してしまったのである。

この島には対岸まで細い砂州があり、月に数度、大潮の日には胴長を着て歩いて渡ることが出来る。私は潮と瀬を読み、二キロの海を渡ろうとした。

ほぼ半分まで渡ったときのことだ。私はすぐ横で異様な鼻息がするのに気がついた。

懐中電灯の光で確かめると、犬のグルである。眠っていたので安心して出てきたのだが、いつの間にか追ってきていたのである。

まだ、水が冷たいところだった。グルはここで初めておぼえた犬かきをしていたが、水温が低いために力を使い果たし、目をつり上げ、息も絶え絶えだった。

——いけない。殺したか。

そう思ったとたん、私は瀬を踏みはずし、五度か六度の海水に首まで浸ってしまった。そうなる

と、胸まである胴長はかえってやっかいである。私は犬の名を呼びながら、自分の無謀を恥じた。助かったのは、海での長い経験のお陰だろう。私はものを書くようになってはじめて、原稿の発送をあきらめ、泳ぎながら胴長を脱いでいった。それから、息絶え絶えのグルの前足の間にからだを入れ、島の瀬を目ざしたのである。

グルがおんぶを好きになったのはそれからである。私が背を向けると乗ってきて、いつまでも気持よさそうにおおさっている。過保護だと笑う人もいるが、生死を共にした思い出があり、私はグルを背にして浜を歩くのが好きだ。

そのグルがけたたましく吠え立てたのは、朝から吹荒れた北風がやんだ九月の夕暮れ時であった。

対岸から矢のように小舟がやってきて、へさきに立っている漁師が叫んだ。

「先生。人が……」

私はその声と同時に、衣服を脱ぎすてていた。北海道の海辺に住むからには、海難事故にぶつかるだろうとは覚悟していたのだ。

私は妻にどなった。

「スーツ。シャンプー。マスク。ウェイト。そら、急げ!!」

頭から水をかぶり、シャンプーをまぶし、舟を岸に着けた漁師に訊いた。

「何分経った?」

「さあ……」

「転覆したのは？」

「二十分前だとか……いや、浜で聞いたときに二十分だから、ここまでの時間を入れると四十分だべか」

「四十分？」

「もっとだべか。そら、あそこに舟をかけてあんが、あそこでいなくなっちゃっただ」

「深さは？」

「三ピロか四ピロでねえべか」

「底は？」

「え」

「砂地ですか岩場ですか」

「ああ、砂地だよ。錨うっても、何もかかりがねえところですよ」

それだけの情報を得る間に、私はスーツを着て、スキndaイビング用の用具を点検し終わっていた。幸いにも、潜水の助手をつとめてくれる弟が、霧多布から新聞を積んでやってきた。

この暗さでは、すもぐりというわけにはいかぬ。魚網にでもまかれたら、こちらの命がない。

私は弟に、友人が残しておいてくれたポンペを霧多布から運ぶよう頼んで現場へ急行した。